



ゆめ通信

2022.9.1 No.123

発行 日本養豚事業協同組合

〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10
八重洲早川第2ビル6階

TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

第22回通常総会開催

理事長 松村 昌雄

7月29日東京都内に於いて、第22回通常総会が無事終了いたしました。今回は昨年12月から4月までの5か月決算となったこと、及び新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から書面決議での開催とし、総会の様子をウェブ配信いたしました。議長には山本孝徳氏（有限会社アクティブピッグ代表取締役・愛知県）に務めていただき、上程した議案は全て原案通り可決決定されました。第22期末の組合員数は424名で、前期比2名増加となりました。また、今期は第21回通常総会にて決議された通り賦課金を徴収しないこととなりましたが、当期末処分利益は2140万円となり、利用分量配当を500万円とする剰余金処分案も承認されました。

22期の活動としましては、理事会、飼料品質研究会など会議は参集とオンラインのハイブリットで行い、セミナーに関してはウェブ開催いたしました。第23期からは社会情勢を鑑みながら徐々に対面でのセミナー、支部会を開催してまいります。

7月には栃木県の大規模農場で83例目となる豚熱が発生し、その殺処分に2か月半もの期間を要すると言われています。農場や殺処分に関わる方々に事故のないよう、無事にこの長期間の殺処分が終わる事をお祈りする一方で、飼料・資材高騰などの養豚を取り巻く現状でこの判断は正しいのか、他に手段はないのか改めて考えさせられております。国の防疫の考え方に対する異論を検討せざるを得ない状況です。また、防疫という観点では我々人間の新型コロナウイルスによる感染拡大・減少が何度も繰り返しておりますが、組合員および従業員の皆様の無事を祈るばかりです。

為替140円／ドルやトウモロコシ8ドル／ブッシュ

ル以上という過去の相場の経験から、現在も大豆高値は続いているものの天候相場に移行しつつあり、上がる可能性は全くないわけではないと思いますが、飼料高騰はピークアウトに向かっていると考えております。

一方で国の配合飼料価格安定制度では第1四半期（4－6月）の補てん金の額が確定し9,800円となり、通常補てん金5,039円（四分割され支払予定）、異常補てん金4,761円と伺っております。通常補てん金は分割交付されるため、とても厳しい状況です。第3四半期、第4四半期とさらなる高騰となれば、積み立てをする我々養豚家、飼料メーカーはもとより、基金そのものが破綻しかねない状況です。やはりここでの飼料高騰の終焉を願わざるをえません。

7月上旬には加熱しすぎた高豚価で枝肉相場が一時800円／kgとなりましたが、急激な高騰に流通側の取り扱いが一気に減り、数日で200円／kgも下落しました。やはり飼料高騰状態においても平均550円／kgほどで経営できるようなコスト管理が求められていると思います。そのためにも組合の基本方針である「良い豚、良い餌、良い管理」の呼びかけを徹底してまいります。

取引先から値上げの打診を受けている資材もありますが、組合としては最終的な利用分量配当が減っても、極力資材の価格上昇を抑えて供給を続ける方針です。養豚を取り巻く環境は益々厳しく大変な時代ですが、組合員の皆様との団結の力で乗り越えていきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願い致します。

第1回若者が夢を語る会開催

7月1日（金）～2日（土）東京都内に於いて「第1回若者が夢を語る会」（以下、若夢会）を開催し、養豚業界の次世代を担う全国の20代から40代までの後継者および従業員50名が参加しました。若夢会の発案者でもある山本副理事長は「自分自身が若い頃に青年部などの活動で学び、そこで全国の養豚仲間ができ、現在もそれが力になっている。みなさんにとってもこの若夢会がそのような場となるよう、ぜひ意義のある2日間にしてほしい」と挨拶しました。

最初の講演は石川貴泰氏（有限会社石上ファーム 常務取締役）より「NEVER GIVE UP! 未来への挑戦」と題してなされました。

母豚約3000頭の企業養豚の後継者となる中、経営方針の異なる先代との確執や従業員と意思共有の難しさ、急速な規模拡大による農場管理の問題点を包み隠さずお話しされました。それを施設の改修や人材教育において「弱点克服よりも強みにフォーカスする」という明確なビジョンを社内全体で共有する中で問題を解決するも、他社大農場が隣接する影響もありPED、PRRSで非常に苦しい思いをされ、(有)サミットベテナリーサービス石川先生らと試行錯誤の中、バイオセキュリティを強化し現在は事故率を下げて安定していると説明されました。また行政指導上放水できない立地での排水処理問題をむしろ液肥として加工して売り出すという発想の転換で解決され「未来は明るい」と語るその前向きな発言と行動に多くの参加者に関心と呼びました。

続く講演は水野慎太郎氏（有限会社みずの 代表取締役）より「夢をかたる会」と題してなされました。

母豚600頭一貫経営の現状までの経緯と現状の農場を写真を通して使用感まで含めた事細かな説明をいただきました。とくに豚事協加入をきっかけに「(有)マルミファームの真似をしています」との発言に場は和み、飼料ゆめシリーズ導入、種豚Topigs導入をはじめ豚房仕切りの水道管までモデルにされたそうです。その結果としての好成绩データに「良い豚・良いエサ・良い管理」の実践内容を見せていただきました。夢は「仲間と共に成長し、喜び合える人間・会社になりたい」、地元宮城の野菜農家との連携で道の駅・直売所運営や震災復興の空物件を活用したバイオマス発電、そして引きこもり支援という3事業を養豚を中心に広げていきたいと語られ、最後に今後はさらなる生産者同士の連携が必要で、この場で交流を深め一人でやるのではなく「みんなでやる」養豚業界の未来

について語ろうと締めくくられました。

その後は懇親会が行われ、盛んな意見交換や活気あふれる交流がなされました。

2日目は齋木正剛氏（有限会社サイキ 専務取締役）が「どうする養豚経営」と題してご講演されました。

就農時に母豚100頭一貫経営ではじまり、次第に自身ですべて豚舎づくりまで行父と施設・仕組みを新設して拡大したいという齋木氏と対立する中、古い設備のまま外部研修で学んできた2・10システムの導入などで生産性を向上させて家族の信頼を得ていった話は参加する多くの後継者の方々に共感をよびました。しかし、いざ拡大しようと思っても用地、費用が準備できず壁に突き当たり諦めかけていた時、農場にPRRSが侵入し事故率が上がり厳しい状況は続きました。そんな時に地元JAから物件の紹介があり旧農場を廃止し、母豚350頭の新農場を設営することになり、念願の一続きで外部接触のない現代的な農場となり事故率の大幅な低下と生産性の向上ができませんでした。齋木氏の夢は母豚1万頭、それに向けて本年より鹿児島の新農場を稼働させる計画に参加者は驚きを隠せぬようで、その後も質問が絶えませんでした。

講師3人と山本副理事長を座長にパネルディスカッションがなされ参加者全員が夢を発表して会場の熱意は高まる中「第2回、第3回と開催を続けたい」と山本副理事長の言葉で終了しました。参加者の90%は参加が参考になり大変満足とアンケートでお答えいただき、同世代の講演や交流を通して各自の夢が膨らみ、新たな世代の繋がりの輪が広がり未来に繋がる会になりました。

今回都合がつかず参加できなかった方も、開催をこのゆめ通信で初めて知った方も次回開催にぜひともご期待ください。（加藤）



パネルディスカッションの様子

第3回豚事協ウェビナー開催

6月3日13時より第3回豚事協ウェビナー「アメリカ養豚の“今”から考える日本養豚の改善策」を開催しました。アメリカミズーリ州の養豚企業にて繁殖管理とマネジメントを学習中の渡部佑悟先生に“研修農場におけるマネジメントの紹介”とさらに参加した学会から得た知見を組み合わせ、日本養豚での改善点についてお話いただきました。講演の概要は下記のとおりです。

私見も入るが、アメリカ人の働く目的は、1. 給料を得て生活を支えるため、2. 自身のキャリア形成のため、が挙げられる。私のイメージとして日本は割と雇用者が上で労働者が下という関係性だと思うが、アメリカはより雇用者と労働者は対等に近く、成果が上がらなければ職を失うリスクが高いこともあり、アメリカ人は日本人よりもハードワーカーが多いと感じている。その分オンとオフの切り替えが上手で、オフの人には何を言っても仕事にはかかわってこないが、オンのときには集中して仕事に取り組む。日本はメンバーシップ型（“仕事”ではなく“人”に賃金を支払う）雇用が主流であるのに対し、アメリカはジョブ型（決められた“仕事”に対して“人”を雇う）雇用が主流である。

研修中の農場内の組織としては、トップに農場全体のマネジメントをする“マネージャー”、その下に繁殖生産数字のマネジメントをする“繁殖リーダー”と分娩成績のマネジメントをする“分娩リーダー”がいて、さらにアメリカ人を含む永住権を持つ“ワーカー”、主に3年もしくは1年ビザを取得したメキシコ人が多い“トレーニー”、そして学生などの“インターン”が農場を支えている。外部組織としては、トップから施設・人員を所有する“オーナー”や豚を所有する“パッカー”、次に経営や企業戦略などの重要な事項に決定権を持つ“ゼネラルマネージャー”、そして生産に関する責任を持つ“生産マネージャー”、生産技術指導を行う“スーパーバイザー”、“農場マネージャー”という順番で農場を支えている。

人の入れ替わりがかなり多いため、生産性を維持するための人材管理のマネジメントがとても重要で、グループトレーニングと個別トレーニングを組み合

わせて行い、指導後のフォローアップが大事だと考えている。指示は単純明快で分かりやすく行い、従業員が自分で答えを出せるように導くコーチングが実施されている。

農場（生産）マネジメントとしては、週当たりの出荷頭数を維持することが最も重要だと考えていて、そこに至るための受胎率、離乳頭数はあまり重要な指標として考えていないようである。疾病マネジメントとしてバイオセキュリティと疾病撲滅があり、バイオセキュリティの実施や実施状況の管理、ハードクロージャー、デポピュレーションの実施と、実施状況の管理がある。

PRRSウイルスの侵入（管理獣医師による侵入経路予想は「人」による持ち込み）により繁殖成績が32%下落し、ワクチンや管理方法変更による回復が見込まれず、離乳豚の受け入れ先農場でも離乳後事故率が増加したこと、またPRRSウイルスが侵入する以前から定期的に行っていたPRRSウイルスの循環状況を調べるための睾丸液検査でもウイルスの状況が安定しなかったことから、ハードクロージャー・デポピュレーションを実施することを決定し、現在豚がいない状態である。大まかな流れとしては、繁殖農場閉鎖（候補豚の導入を行わない）を約210日間実施、その間に繁殖農場から100km離れたGDU（候補豚育成農場）で候補豚の導入・発情確認・交配を実施（通常は育成後、繁殖農場に移動して交配）、繁殖農場内に豚が全くいない状態を1週間維持し洗浄消毒を徹底した後、交配済みの候補豚を導入し、農場再開となる。

アメリカではアニマルウェルフェアの認証基準はたくさんあるが、最低限カバーしなければいけないのは「カリフォルニア州法12」（ゆめ通信No.121参照）である。実際アメリカでアニマルウェルフェア認証審査を受けた感想として、基本的には書類がしっかり揃っていて、現場が普段通りの作業をしていればパスできていると思っている。つまり通常の管理を確実に実践することが「日本のアニマルウェルフェア」だと言っているのではないかとと思っている。（東野）

Topics

JASVベンチマーキング 2021年の総括と今後の取り組み

(一社) 日本養豚開業獣医師協会
呉 克昌

はじめに

JASVベンチマーキングは2004年の日本養豚開業獣医師協会（JASV）設立以来、最も力を注ぎ取り組んできたJASV事業の重要な柱の一つです。その最大の役割は、農場間の生産性及び経営分析データの比較による自農場の立ち位置の明確化と、それに伴う改善の方向性の決定に役立つ重要なツールとして、生産者の皆様に役立つことです。今までの発展の過程でJASVベンチマーキングシステムは農研機構動物衛生研究部門（動衛研）との共同研究を通じてPigINFOという名前で、日本養豚事業協同組合の生産者の皆様をはじめ、多くの生産者の方々にご活用いただけてまいりました。この紙面をお借りして参画いただいている皆様に厚くお礼申し上げます。

動衛研の山根逸郎先生の定年退職に伴い、上記の共同研究事業は2022年3月に終了しました。これを機に、JASVは独自にWEB上で生産者、担当獣医師の入力やタイムリーな結果の閲覧が可能となるベンチマーキングシステムに移行することを決定し、現在、専門会社に依頼し新しいシステムを開発中です。2022年第3四半期（7～9月）のデータからの運用開始を目指しています。さらに、データの解析やシステムの改善等について明治大学のご協力を得ることも決定しました。これらのことにより参加される生産者や獣医師の皆様にとってより有益な解析結果のご提供やシステム改善を実現し、JASVベンチマーキングシステムの継続的な進化、発展を推し進めます。

ここでは2021年のJASVベンチマーキング分析結果の総括について報告させていただくとともに、今後のJASVの取り組みについてその詳細をご紹介します。

2021年JASVベンチマーキング総括と一部海外のデータとの比較

表1に参加171農場による2021年間の成績表を示します。粗利益（/母豚/年）の中央値410,540円は前年比約96,000円低い数字となりましたが、枝肉価格（/kg）480.8円は前年比17.7円安くなった一方、飼料価格（/kg）50.8円は7.2円高くなったことが大きく影響したと考えられます。また、その中央値と上位10%との差は約20万円あり、この差は8年前の約10万円の2倍となり較差がより大きくなりました（図1-1～1-3）。

繁殖成績では、総産子数（/腹）14.4、生存産子数（/腹）12.8は過去8年間でそれぞれ2頭程度上昇しました。管理の向上による部分もあるとは思いますが、遺伝改良による影響が大きいと考えられます。ただし、死産数（/腹）1.67も年々上昇し、下位10%は2.2頭を超えており（図2-1～2-3）、同年のアメリカにおけるピッグチャンプベンチマーキング（表2、292農場のデータ）の死産子豚数+黒子頭数の中央値1.55頭との比較においても0.12頭多く、改善の伸びしろのあるエリアと考えられます。今後、集中した改善努力を実施することにより成績の改善できる農場が多いと推測します。なお、ピッグチャンプの上位10パーセンタイル（上位10%に位置する農場の成績のことでJASVベンチマーキングの上位10%と同じ意味）に注目し、自農場の成績と比較してみてもは如何でしょうか？ 輸入ポークの多くを占めるアメリカと成績面で負けないためにその上位10%の農場に伍することが必要ではないでしょうか。

肥育成績では、出荷枝肉重量kg（/母豚/年）の中央値1789.6kg、上位10% 2168.8kgは前年とほとんど変化がありませんでしたが、中央値と上位10%の差

図1-1 粗利益（/母豚/年）単位：万円

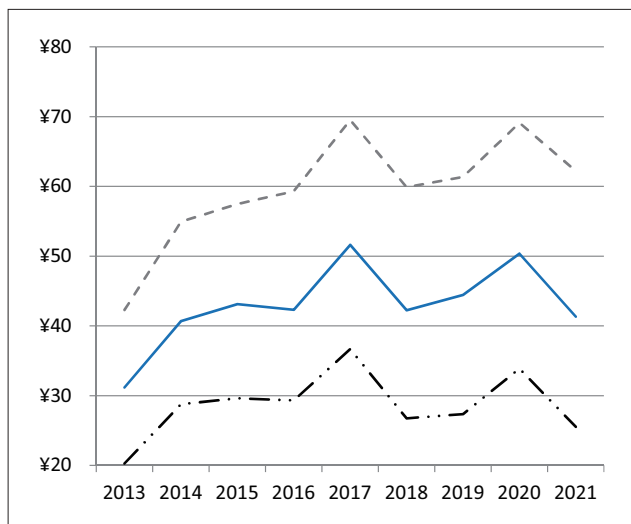


図2-1 総産子数（/腹）

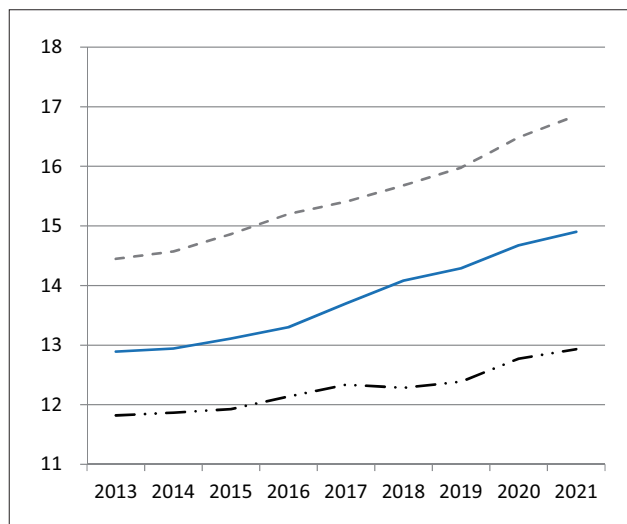


図1-2 枝肉価格（/kg）単位：円

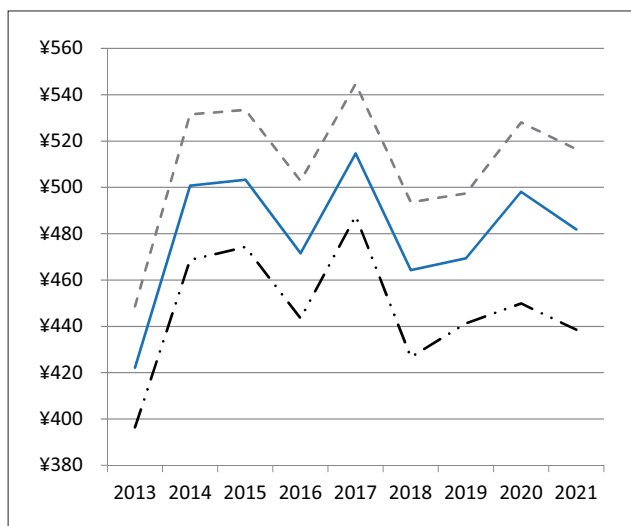


図2-2 生存産子数（/腹）

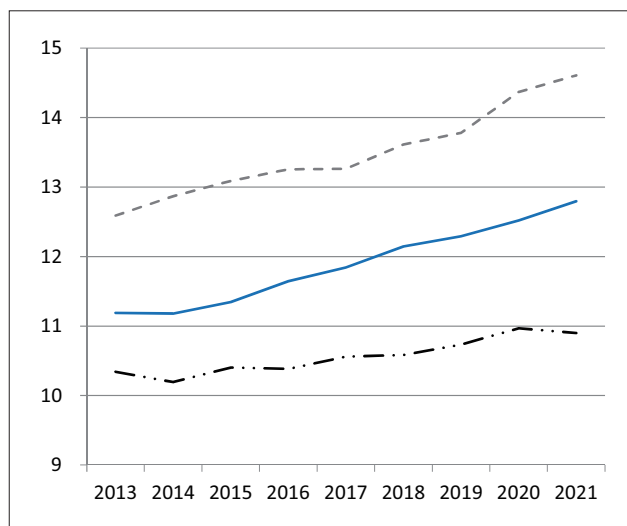


図1-3 飼料価格（/kg）単位：円

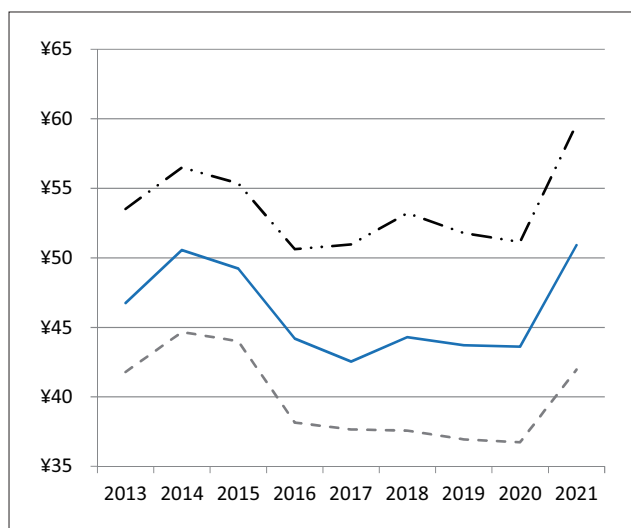
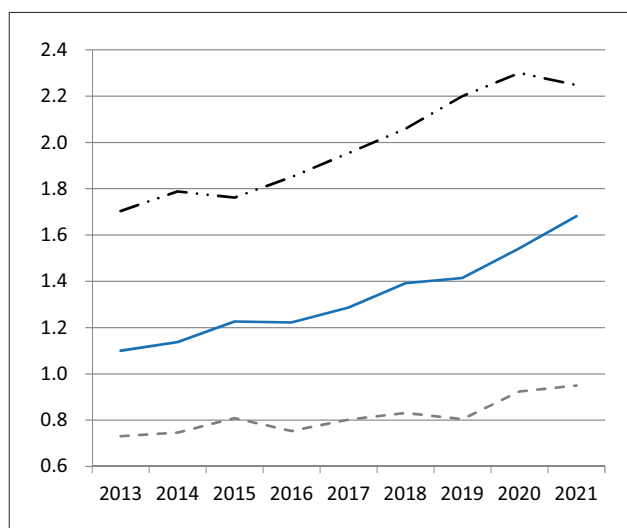


図2-3 死産数（/腹）



は380kgとなっており8年前より100kg以上較差が広がっています。また、5月に開催されたJASVベンチマーキングセミナーで2021年のこの部門で表彰された上位2農場はともに2,500kgを超えており、その数字に驚くとともに、母豚、肥育豚の遺伝的能力を十分に引き出した結果と考えられ、今後の生産者の進むべき道を示していただいたことに対して非常に心強く感じました。一方、増体重(g/日)の中央値627.9gは過去8年間大きく変化しておらず、上位10%でも718g程度とまだまだ改善が必要なエリアと考えられます。特に増体重を改善することは2023年1月から始まる枝肉格付け基準の変更に伴う上物の上限重量が現行よりも3kg重い83kgとなることのメリットを享受するために非常に重要でしょう。また、下位10%ではパークシャーなど純粋種の農場の成績が多く入っていると考えられますが、8年前よりも数字が低下していることが気になるところです。農場枝肉FCR4.73は年々改善されていますが、肉豚枝肉FCR4.04の改善カーブは農場枝肉FCRのカーブよりも緩く、まだまだ改善が必要な状態です。また、下位10%ではほとんど変化が見えませんが(図3-1～3-4)。

ワクチン・抗菌剤費と離乳後事故率の中央値は年々じわじわと上昇してきており(図4-1、4-2)それぞれの中央値1693.9円、6.79%は8年前と比較して205円、1.14%上昇しています。それぞれの項目において極端に高い数値の農場が増えていることが影響していると推測されますが、そうした農場の成績改善は大

図3-2 増体重(g/日)

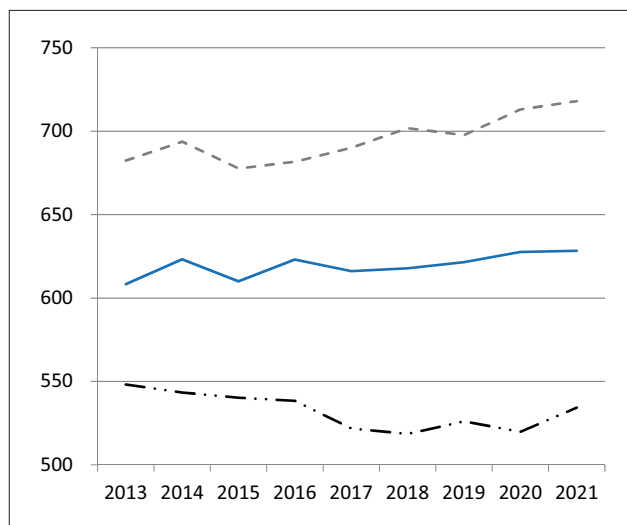


図3-3 農場枝肉FCR

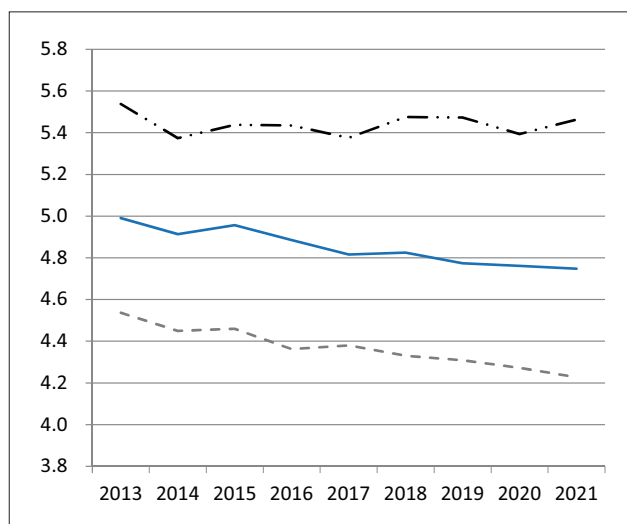


図3-1 出荷枝肉重量kg (/母豚/年)

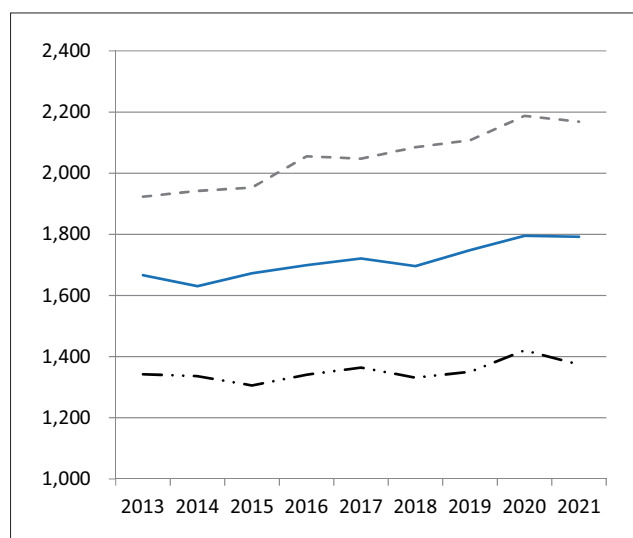


図3-4 肉豚枝肉FCR

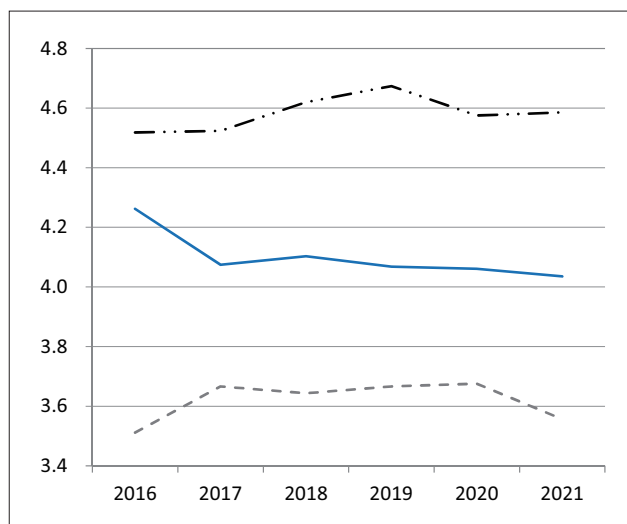


図4-1 ワクチン・抗菌剤費（/肉豚）

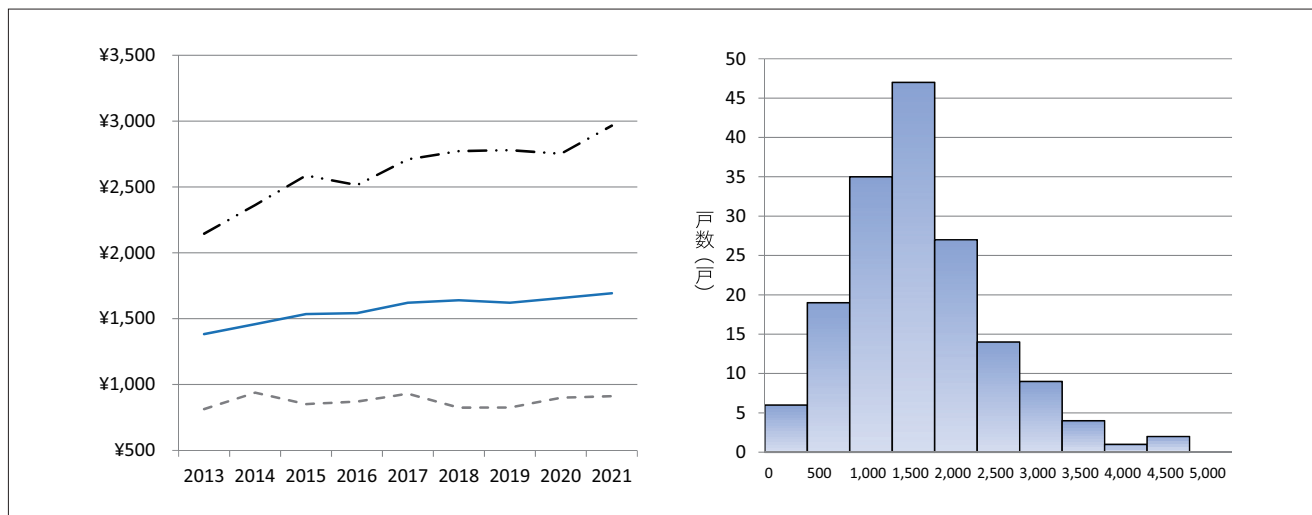
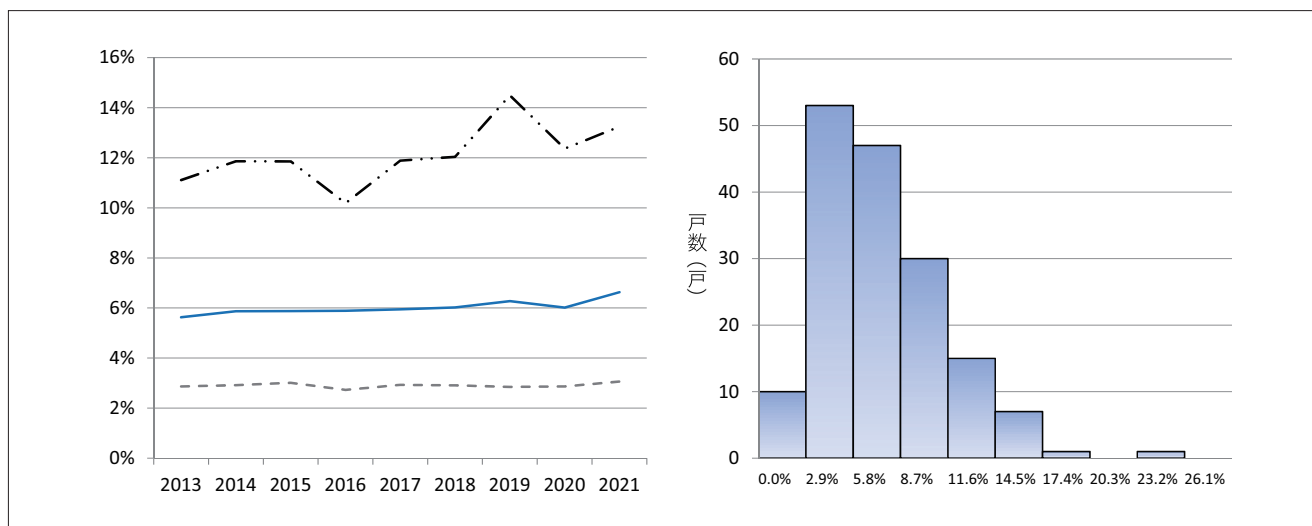


図4-2 離乳後事故率



きな課題でしょう。反対に上位10%の成績は安定しており、成績の良い農場はその維持が重要でしょう。

また、労働生産性を推定する指標として粗利益（/従業員/年）がありますが、その上位10%は中央値の1.7倍と非常に大きな較差となっています。また、設備生産性を推定する指標としての粗利益（/m²/年）と出荷枝肉重量（/m²/年）でも1.5倍、1.4倍と、これらについても大きな較差があり伸びしろの大きいエリアと言え、今後、肉豚生産費の固定費部分の削減にはこれら労働生産性と設備生産性を改善することが重要でしょう。

JASVベンチマーキングの今後の取り組み

上述のように、JASVは現在、名古屋に本社のある

システム開発の専門会社(株)ラクールに依頼して、クラウドを利用したWEB上でデータ入力やタイムリーな結果の閲覧が可能なベンチマーキングシステムを開発しています。完成は本年10月を見込んでおり、第3四半期（7～9月）のデータからの運用開始を目指しています。それまでの1～3月及び4～6月のデータの分析はJASV理事の伊藤貢先生のご協力を得て、結果のフィードバックを行っていきませんが、一部、今までにない新たな分析帳票があることと今までと同じデータでも見え方が多少異なることはご了解いただきたいと思います。新システムの開始時期はあらためて参加農場の皆様にご案内を差し上げます。新システムでは、生産者が直接データを入力することもできますし、今まで通り担当獣医師にデ

ータを送り獣医師が入力することも可能となります。ただし、データは担当獣医師が必ず確認、承認して初めてベンチマーキングの解析が開始される仕組みとすることにより、ベンチマーキングデータの正確性をJASV獣医師が担保するという今までの方針は変わらず、重要なポイントと考えています。新システムでは毎月のデータの解析もできる仕組みとしますので、参加者のご意向も確認した上で、月次のベンチマーキングができる方向に進むべく、早期に検討したいと考えています。

JASVはJASVベンチマーキングの更なる研究、発展のために外部の公的機関の専門家のご協力を得ることを決め、明治大学とデータの取り扱いに関する秘密保持契約を結びました。その上で、農学部農学科の佐々木羊介先生（動物生産学研究室専任準教授）

にご協力を得ることで合意し、取り組みを進めます。佐々木先生はこの春まで宮崎大学に居られ、長年ベンチマーキングなどの研究をされてきた新進気鋭の先生で、今後、JASVベンチマーキングの結果の評価をいただくこと、今までのベンチマーキングデータから今後の日本の儲かる養豚のかたちを探っていただくこと、そしてJASVや参加者とのミーティングを通じて更に有益なデータの見方、解析方法の検討と提言をいただく予定です。さらには佐々木先生の研究室の学生にベンチマーキングデータを使った研究を実施してもらうことにより、養豚に興味を持っていただき、将来的に養豚業界に役立っていただける優秀な人材を輩出していただければ非常にありがたいと考えています。

JASVとしてはこうした新たな取り組みにワクワク

表1 2021年間JASVベンチマーキング成績表（全体）

	項目	上位10%	上位25%	中央値	下位25%	下位10%
1	粗利益（/母豚/年）	¥618,946	¥513,530	¥410,540	¥325,246	¥244,779
2	販売額（/母豚/年）	¥1,070,314	¥952,591	¥848,070	¥730,118	¥613,753
3	粗利益（/肉豚）	¥23,364	¥20,518	¥17,947	¥15,318	¥12,423
4	販売額（/肉豚）	¥39,323	¥38,061	¥36,675	¥34,908	¥32,266
5	飼料費（/肉豚）	¥15,109	¥16,713	¥18,518	¥20,507	¥22,621
6	粗利益（/従業員/年）	¥32,389,031	¥25,583,611	¥18,989,195	¥15,267,093	¥9,852,739
7	粗利益（/m ² /年）	¥57,059	¥48,197	¥38,352	¥29,698	¥22,763
8	売上飼料比率	39.9	45.2	51.1	56.4	63.7
9	ワクチン・抗菌剤費（/肉豚）	¥931.2	¥1,233.7	¥1,693.9	¥2,234.6	¥3,000.7
10	出荷枝肉重量（/母豚/年）(kg)	2,168.8	1,950.5	1,789.6	1,584.8	1,361.1
11	出荷枝肉重量（/m ² /年）(kg)	224.4	196	165	131.8	105.6
12	枝肉価格（/kg）	¥516.5	¥498.3	¥480.8	¥465.3	¥438.1
13	出荷頭数（/母豚/年）	27.9	25.8	23.4	21.4	17.7
14	枝肉重量（/頭）(kg)	78.7	77.6	76.0	74.0	72.6
15	離乳後事故率	3.06%	4.11%	6.79%	9.74%	13.28%
16	飼料価格（/kg）	¥41.8	¥46.8	¥50.8	¥55.6	¥59.6
17	飼料費（/枝肉）	¥192.4	¥219.5	¥244.8	¥272.3	¥293.6
18	増体重（g/日）	718	682.7	627.9	567	526.7
19	出荷日令	164.4	173.9	184.9	201.4	220.9
20	農場枝肉FCR	4.22	4.44	4.73	5.03	5.37
21	肉豚枝肉FCR	3.56	3.78	4.04	4.27	4.65
22	肥育密度（m ² /頭）	0.76	0.91	1.06	1.27	1.59
23	離乳子豚数（/母豚/年）	30.78	28.28	26.52	24.13	21.69
24	離乳子豚数（/クレート/年）	137.3	116.7	96.1	83.7	74.7
25	離乳子豚数（/腹）	12.76	11.93	11.21	10.53	9.86
26	分娩回転率（/年）	2.47	2.43	2.33	2.24	2.15
27	哺乳中死亡率	6.37%	8.53%	11.59%	14.39%	17.73%
28	生存産子数（/腹）	14.61	13.91	12.8	11.81	10.89
29	分娩率	93.6%	90.5%	86.4%	81.9%	76.4%
30	総産子数（/腹）	16.35	15.6	14.4	13.51	12.4
31	死産数（/腹）	0.95	1.3	1.67	1.99	2.25
32	常時母豚数	2,023	1,042	503	244	105

しています。今後、JASV内にベンチマーキング委員会をつくり、生産者や佐々木先生とのミーティングを通じて、新システムを活用し、より有益でタイムリーな情報の提供が可能となることに大いに期待しています。なお、ベンチマーキング参加費用はシステムの更なる改善、開発や明治大学での研究などに大切にに使わせていただく予定です。

まとめ

今回は貴重な紙面をお借りして、2021年JASVベンチマーキングの総括と今後の取組について説明させていただきました。JASVは参加者の声をよく聴き、明治大学とも連携して、今後もこのシステムを進化、発展させるための開発を継続して参ります。養豚専

門獣医師集団であるJASVが生産者、研究者の皆様と一緒に運営、成長させる世界にも例のないパワフル、タイムリーな素晴らしいベンチマーキングシステムの構築に向けて努力して参りますので、今後とも皆様のご協力をお願いいたします。また、まだ参加されていない生産者の皆様には、是非この機会にJASVベンチマーキングに参加いただきますように心よりお願い申し上げます。参加申し込みなどの詳細は以下のJASV事務局にお問い合わせください。

<問い合わせ先>

(一社) 日本養豚開業獣医師協会 (JASV) 事務局
TEL 029-875-9090
メール pig.jasv@r7.dion.ne.jp

表2 2021年米国ビッグチャンプベンチマーキング結果



米国 2021年要約

農場数= 292

指標	平均	標準偏差	中央値	上位 10 パーセン タイル	下位 10 パーセン タイル
総交配回数	5666.21	5570.490	4598.50	13196.00	277.00
再発情交配頭数	284.87	368.096	142.50	750.00	10.00
再発情率	5.67	4.986	4.48	11.39	0.96
分娩母豚数	4929.41	4906.100	3841.50	11459.00	240.00
総産子数	75617.71	76267.380	55994.50	175817.00	3603.00
平均産子数/腹	15.20	0.994	15.23	16.37	13.98
総生存子豚数	67449.43	68389.390	51547.00	154270.00	3102.00
平均生存子豚数/腹	13.54	0.860	13.56	14.58	12.53
生存子豚数/雌豚/年	29.54	4.933	29.65	34.89	23.99
総死産子豚数	5403.55	5790.150	3965.50	12662.00	321.00
平均死産子豚数	1.14	0.389	1.13	1.63	0.69
総黒子頭数	2764.70	3629.340	1433.50	7090.00	31.00
平均黒子頭数	0.52	0.495	0.42	0.96	0.06
分娩率	82.06	9.952	84.14	90.25	73.46
離乳前事故率	15.70	5.222	14.75	22.47	10.19
分娩及び離乳母豚数	4888.28	4836.360	3806.50	11392.00	235.00
平均離乳日齢	20.84	2.550	20.36	23.00	18.91
総離乳子豚数	56052.92	57050.540	44007.00	129187.00	2543.00
平均離乳腹重量(kg) (n=32)	56.54	42.85	55.29	85.23	25.79
離乳子豚数/離乳腹	11.85	0.890	11.94	12.94	10.70
離乳子豚数 / 交配雌豚 / 年	26.08	4.495	26.67	30.91	20.27
離乳子豚数 / 雌豚 / 年	24.83	4.627	25.07	30.29	18.89
導入雌豚頭数	1286.35	1673.860	837.50	2941.00	33.00
母豚及び候補豚死亡数	332.99	370.749	246.00	677.00	11.00
死亡率	14.86	7.948	14.30	21.30	7.30
母豚及び候補豚淘汰数	1148.43	1410.770	770.50	2519.00	38.00
淘汰率 (n=273)	46.29	16.360	46.00	66.60	25.90
総母豚数	2282.83	1944.030	2137.00	4951.00	504.00
期末雄種豚在庫頭数	97.77	1503.760	3.00	13.00	0.00

Topics

ベンチマーキングに参加して10年 継続することの意義と参加して感じること

有限会社マルミファーム
代表取締役社長 稲吉 克仁

ベンチマーキングに参加して10年

日本養豚開業獣医師協会（JASV）のベンチマーキング（PigINFO）の普及に協力する形で豚事協のベンチマークが始まったのが2012年だったと記憶しています。当時の成績は表1の通り、粗利益部門では2008年に導入したリキッドフィーディングとエコフィードの利用で3位の成績が出ていましたが、生産成績は「C、D」判定も多くあまりパツとしない成績でした。当時は2009年にTopigsを試験的に導入して採用を決め、種豚を入れ替えた頃で、Topigsの分娩割合は約50%程度でした。また、PRRSは陽性でしたが目立った被害はありませんでした。

その後、2014年にはTopigsの分娩割合も100%になり、年間1母豚当たりの離乳子豚数も30頭を達成することができました。

表2は5年後の2017年です。PRRSも陰性化し、成績も安定した頃です。31項目中23項目が「A」判定でした。この頃はまだ他農場でも多産系の母豚の普及も始まったばかりでベンチマーキングに反映されていないという印象でした。

10年目の2021年の成績は表3の通りです。2016年から2018年の間は「A」判定がほとんどでしたが、2019年頃から多産系の種豚へ切り替えた他の農場の成績が出始め、年間1母豚当たりの離乳頭数が31頭を越えても1位を取ることが難しくなってきました。2021年に至っては、年間31.34頭離乳しても11位、年間1母豚当たりの出荷枝肉重量が2381.5kgあっても5位と弊社の成績は決して悪くは無いのにトップ3に入ることは難しくなりました。上位の成績がこの10年間で飛躍的に伸びたと言えます。

高成績を維持するためのポイント

ベンチマーキングで高成績を出せたおかげで全国各地に講演に呼んでいただきました。その際に以下に挙げるように「生産性を向上させるポイント」を3つ、「生産性を向上し、経営を継続させるためのポイント」を3つお話しさせて頂いています。

- ・生産性を向上させるポイント
 - オールインオールアウトの生産システム
 - 飼料の効率利用とコストダウン
 - Topigsの導入
- ・生産性を向上し、経営を継続させるためのポイント
 - 情報・データの収集と分析
 - 人材育成と管理技術
 - 地域との関わり

オールインオールアウトを継続することでPRRSの陰性化に成功しました。これは成績向上のために非常に重要なことだったと思います。また、リキッドフィーディングの導入で飼料の効率化とコストダウンが図れました。そして最も効果的だったのがTopigsの導入による生産成績の向上です。ピッグフローの関係上、母豚数を1割減らしても出荷頭数が2割増加しました。PRRSが陰性化し、離乳する1群の頭数を180頭から210頭に増やしても増体重量への影響や事故率の増加はありませんでした。

情報やデータの収集と分析に寄与したのはやはりベンチマークです。弊社は元々データを色々取って分析するのは日常的でしたが、他農場と比較して自農場の成績がどの位置にあるのか、長所・短所の判断ができることは現場のモチベーション、成績目標を明確にできるという点で良かったと思います。

特にここ数年の成績上位の数字を見ると「うかうかしてられない」と感じます。日本の養豚技術、成績数値が別次元に入ったと感じます。ベンチマーキングに参加することで「井の中の蛙」とならず済んでいます。

これからのベンチマーキング

これまでPigINFOはJASVと動衛研で運営されてきましたが、今後JASV独自のベンチマーキングが運営されることになりました。これまでと同様に継続されながら新しい試みも期待されます。

また、昨今持続可能な開発目標（SDGs）がよく取り上げられ、養豚業界にも当てはめられることは多々

あります。以下にベンチマーキング用にアレンジした17の国際目標のうちの一部を挙げてみます。

➤ ベンチマーキングに参加しよう！【目標1、4、8、9、10】

- ◆ 目標4「質の高い教育をみんなに」
 - ・ 情報共有してお互いに切磋琢磨する。
- ◆ 目標8「働きがいも経済成長も」
 - ・ ベンチマーキングを元に成績を上げれば自ずと達成することができます
- ◆ 目標9「産業と技術革新の基礎をつくろう」
 - ・ 情報共有することで技術革新に繋がる、ヒントになる
- ◆ 目標1「成績格差をなくそう」
 - ・ 情報共有して成績格差をなくそう
- ◆ 目標10「情報不足による不平等をなくそう」
 - ・ ベンチマーキングで情報僻地をなくそう

ベンチマーキングは持続可能な養豚経営に必要な一つのツールです。ベンチマーキングに参加しない理由に「成績が悪いから恥ずかしい」、「成績が良くなったら出すよ」、「数字をまとめるのが面倒くさい」とよく聞きます。そのような農場はなかなか数字が出て来ません。成績が悪くても恥を晒すことで良くなるきっかけを掴むことが大切です。まずはベンチマーキングに参加して自分の立ち位置を見極めるところから始めましょう。

表1 2012年

順番	項目	結果	順位	判定					
				A	B	C	D	E	F
1	粗利益(母豚/年)	¥431,803	3	A					
2	販売額(母豚/年)	¥975,097	32			G			
3	飼料費(母豚/年)	¥243,183	4	A					
4	粗利益(肉豚)	¥19,302	2	A					
5	売上飼料比率	38.0%	1	A					
6	粗利益(従業員/年)	¥28,850,214	5	A					
7	ワクチン・抗生物質(母豚/年)	¥30,620	56				D		
8	出荷枝肉重量(母豚/年) (kg)	1,685.1	51			C			
9	枝肉価格(¥/kg)	¥405.4	21		B				
10	出荷頭数(母豚/年)	22.4	48			C			
11	枝肉重量(頭) (kg)	74.4	68				D		
12	産乳後事故率	2.70%	13		B				
13	飼料価格(¥/kg)	¥34.8	4	A					
14	産乳子数(母豚/年)	24.6	35			C			
15	増体重(出生-出荷) (g/日)	646.5	16		B				
16	農場枝肉FCR	4.23	2	A					
17	産乳子数(産)	10.11	47			C			
18	分娩回転率(年)	2.43	28		B				
19	哺乳中死亡率	10.19%	63				D		
20	生存産子数(産)	11.28	43			C			
21	分娩率	85.7%	55			C			
22	産産子数(産)	12.28	49			C			
23	死亡率(産)	1.01	40			C			

表2 2017年

順番	項目	結果	順位	判定					
				A	B	C	D	E	F
1	粗利益(母豚/年)	¥909,677	1	A					
2	販売額(母豚/年)	¥1,255,896	1	A					
3	粗利益(肉豚)	¥29,960	3	A					
4	販売額(肉豚)	¥41,363	14	A					
5	飼料費(肉豚)	¥11,403	4	A					
6	粗利益(従業員/年)	¥42,021,215	10	A					
7	粗利益(㎡/年)	¥71,590	14		B				
8	売上飼料比率	27.60%	3	A					
9	ワクチン・抗生物質(肉)	¥1,079.90	23		B				
10	出荷枝肉重量(母豚/年)	2,374.10	1	A					
11	出荷枝肉重量(㎡/年)	186.6	37			C			
12	枝肉価格(¥/kg)	¥529.00	35		B				
13	出荷頭数(母豚/年)	30.4	1	A					
14	枝肉重量(頭)	78.2	11	A					
15	産乳後事故率	2.21%	6	A					
16	飼料価格(¥/kg)	¥35.70	8	A					
17	飼料費(枝肉)	¥145.80	5	A					
18	増体重(g/日)	730	4	A					
19	出荷日齢	164.8	9	A					
20	農場枝肉FCR	4.08	3	A					
21	肉豚枝肉FCR	3.56	6	A					
22	飼育密度(㎡/頭)	1.09							
23	産乳子数(母豚/年)	31.39	2	A					
24	産乳子数(クレーン/年)	124.9	19		B				
25	産乳子数(産)	12.68	2	A					
26	分娩回転率(年)	2.47	17		B				
27	哺乳中死亡率	8.31%	44			C			
28	生存産子数(産)	13.83	7	A					
29	分娩率	95.00%	2	A					
30	産産子数(産)	14.62	21		B				
31	死亡率(産)	0.79	14	A					

表3 2021年

順番	項目	結果	順位	判定					
				A	B	C	D	E	F
1	粗利益(母豚/年)	¥817,928	1	A					
2	販売額(母豚/年)	¥1,170,553	4	A					
3	粗利益(肉豚)	¥94,721	4	A					
4	販売額(肉豚)	¥93,241	37		B				
5	飼料費(肉豚)	¥11,520	1	A					
6	粗利益(従業員/年)	¥48,852,475	4	A					
7	粗利益(㎡/年)	¥68,947	4	A					
8	売上飼料比率	39.1%	2	A					
9	ワクチン・抗生物質(肉豚)	¥9,137.7	38		B				
10	出荷枝肉重量(母豚/年) (kg)	2,381.5	5	A					
11	出荷枝肉重量(㎡/年) (kg)	184.9	37		B				
12	枝肉価格(¥/kg)	¥421.5	59			C			
13	出荷頭数(母豚/年)	30.6	5	A					
14	枝肉重量(頭) (kg)	77.8	34		B				
15	産乳後事故率	3.17%	20		B				
16	飼料価格(¥/kg)	¥36.9	4	A					
17	飼料費(枝肉)	¥148.1	1	A					
18	増体重(g/日)	732.7	10	A					
19	出荷日齢	168.4	13	A					
20	農場枝肉FCR	4.01	4	A					
21	肉豚枝肉FCR	3.43	9	A					
22	飼育密度(㎡/頭)	1.05							
23	産乳子数(母豚/年)	31.34	11	A					
24	産乳子数(クレーン/年)	129.6	23		B				
25	産乳子数(産)	12.84	12	A					
26	分娩回転率(年)	2.42	48			C			
27	哺乳中死亡率	11.63%	72			C			
28	生存産子数(産)	14.54	20		B				
29	分娩率	96.7%	41			C			
30	産産子数(産)	15.84	31		B				
31	死亡率(産)	1.41	52			C			

とよし 水落東洋子氏のご逝去を悼む

日本養豚事業協同組合 前・理事長、(有)マルミファーム会長 稲吉 弘之

今年5月3日水落氏の訃報の連絡を受けた。2～3年前まではヒマラヤ山脈、エベレスト等世界の有名な山々に登って見えたが、一年ほど前、病に罹られ入院治療中であつた。コロナでお会いする事もかなわず、時々電話でやりとりをしていたが、急変、帰らぬ人となられた。

中小養豚家で、全国組織の役職を20年以上も長く務めたのは、熊本の田代氏と新潟の水落氏と私の3人だけであつた。規模が同程度、歳は今年81歳、82歳とほぼ同年、旅が好き、酒が好きでグルメ嗜好も同じ、お互いに高齢の親と同居、人のお世話をするのも労をいとわず。妻同士もよく気が合った。

こんな共通点を持っていたので、いずれ一緒に旅ができる環境になったら、夫婦で旅をしようと話合ってきた。私たちが両親を見送った12年前から、3夫婦での楽しい旅を年2回程度続けてきた。水落氏は娘さん4人で後継希望者がなく中越地震の影響もあり、2006年廃業された。経営成績が良く老後のゆとりある生活を営むのに余りある貯えもあり、正に養豚業界からの華麗なる退場であつた。

我が国の養豚コンサルタントとして草分け的な存在である富山の山本一郎獣医師が、「肉豚を飼わせたら日本で一番だ」とよくおっしゃっていた。そんな水落氏の手腕を買い、廃業後は日本養豚事業協同組合の養豚コンサルタントとして講演、農場の指導に全国各地を歩いていた。

肉豚出荷時に、1頭、1頭体重を測定する事の重要性を常に説いておられた。今でこそ常識的になってきているが、当時は殆どの養豚家が計測をしていなかった。計測をする事によって、200頭の一貫経営で年間数百万円の利益向上につながる事が一般に理解され、その手法が急速に全国に広がっていった。又、コンサルの後、問題点を適切に丁寧に指摘した報告書をいただけたのも印象に残っている。

そして豚事協の良さもよく宣伝し、組合員を勧誘していただいた。中でも水落氏の紹介で組合に入った山形の五十嵐さんは、「水落先生、水落先生」と心から尊敬し、「水落先生なくして今の我が家の経営は

ない」と心から感謝していた。そんな水落さんのファンは全国に沢山いたと思う。

葬儀の後、娘さんからいただいたお礼の手紙の中の一コマを紹介する。「最後のひと時を、娘として後悔ない程につききりで世話をする時間が持てました。ある夜のこと『長さじゃねえよな。俺は仕事も一生懸命やった。人が行けないような海外の山もたくさん登れた。食いしん坊だから美味しいものも珍しいものもいっぱい食べた。満足の人生だ。』としみじみとつぶやきました。81歳という年齢はまだ若いのにと言われがちですが本人の「満足だ」という言葉がすべてだと思います。長い間母共々楽しく深くお付き合いいただきましたこと、あらためて感謝申し上げます。」このお手紙を拝見して水落氏の人生は良い人生であつたなとつくづく思った。

涙なくして読めない娘さんの心のこもった文章に感激し、息子に見せたところ、「お父さん僕はこんな立派な文章は書けないから、逝くときは挨拶状を書いてから逝ってね」と言われた程の名文であつた。水落さんの人間性の豊かさと頭の良さを受け継いだ立派な娘さん達だと思った。

コロナの落ち着くのを待って生前水落氏と親しくしていた方、10人ほどにお声がけし6月15日お参りさせていただいた。ご両親の端正な顔立ちと温厚な人柄を受け継いだ娘さん4人に迎えられ、樫の太い柱をふんだんに使った100坪を超す立派なご自宅で、水落氏を偲び想い出話に花が咲いた。夜は近くの温泉宿で水落氏がよく送ってくれた地元の「名酒八海山」を味わいながら、悲しみの中にも水落氏の温厚な人柄を偲び冥福を祈った。



水落さんご自宅にて遺影と一緒に

JASVベンチマーキング2021

参加農場185農場の2021年1月～12月間のベンチマーキング解析結果を元に、下記部門の上位三農場および各部門で成績が大きく改善された農場を部門ごとに「Jump Up賞」としてJASVが表彰し、豚事協から副賞として賞金を授与しました。

全受賞者17農場のうち14農場が豚事協の組合員で、有限会社マルミファームが「母豚1頭当たり粗利益部門最優秀賞」を受賞されました。

各部門の最優秀賞受賞者は下記の通りです。おめでとうございます。(東野)

- ・母豚1頭当たり粗利益部門：有限会社マルミファーム（愛知県・組合員）
- ・母豚1頭当たり出荷枝肉重量部門：ファロスファーム株式会社北広島・西城・御調農場（広島県・組合員）
- ・母豚1頭当たり離乳子豚数部門：ファロスファーム株式会社北広島・西城・御調農場（広島県・組合員）
- ・農場枝肉FCR部門：ファロスファーム株式会社北広島・西城・御調農場（広島県・組合員）
- ・離乳後事故率部門：有限会社浅野農場（北海道・組合員）

第21期および第22期利用分量配当実施

令和4年2月25日に開催された第21回通常総会に於いて、収支決算報告書および損益計算書等を上程し、第21期利用分量配当を4,500万円（第20期4,000万円）とする剰余金処分案を可決決定いたしました。これに伴い第21期（令和2年12月1日～令和3年11月30日）の共同購入販売事業の集計を行い、組合員毎の利用分量配当金を決定しましたので、組合員の皆様には6月に当該期の配当額と合わせて、お預かりしている出資金のご案内をすると同時に第22期利用分量配当金と一緒に送金手続きをする旨ご連絡いたしました。

第21期の共同購入販売事業につきましては、指定配合飼料“ゆめシリーズ”は148.3千トン（直接取引16.3千トン、間接取引132.0千トン）で、前期（145.6千トン）を僅かに上まわり、AI関連は精液が193千ドーズ（前期比112%）、カテーテルが952千本（前期比96%）、Topigs Norsvin種豚は豚熱ワクチン非接種地域への出荷制限もありましたが、PSは前期比270頭、GPは同106頭の増加という結果になりました。

配合飼料“ゆめシリーズ”だけの第21期の配当を捉えると387円／トンとなり、組合員の皆様はそれだけゆめシリーズを安く購入されたこととなります。

また、令和4年7月29日に開催された第22回通常

総会に於いて、収支決算報告書および損益計算書等を上程し、第22期利用分量配当を500万円とする剰余金処分案を可決決定いたしました。これに伴い第22期（令和3年12月1日～令和4年4月30日：5カ月）の共同購入販売事業の集計を行い、組合員毎の利用分量配当金を決定し、組合員の皆様には8月に当該期の配当額と合わせて、お預かりしている出資金を改めてご案内し、送金先口座の確認を経て、8月26日に第21期配当金および第22期配当金の送金手続きを実施いたしました。

第22期の共同購入販売事業につきましては、指定配合飼料“ゆめシリーズ”は65千トン（直接取引6.1千トン、間接取引58.9千トン）で、AI関連は精液が79千ドーズ（前期比102%）、カテーテルが428千本（前期比109%）、Topigs Norsvin種豚は短期決算集計のため、前期の導入月との月ずれがあり、GPは前期比32頭の増加となりましたが、PSは同143頭の減少という結果になりました。

当該期間に共同購入販売事業をご利用いただいた組合員の皆様にお礼申し上げますとともに、ゆめシリーズ間接取引の実績の集計にご協力いただきました各メーカーや特約店の担当者の方々に重ねてお礼申し上げます。(東野)

退職にあたり

池田 護

組合員の皆様におかれましては、日頃より養豚用資材の共同購入など、組合活動にご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。さて、私事ではございますが、本年の8月末日をもちまして日本養豚事業協同組合を退職させていただきます。2019年4月から3年5か月の短い期間ではございましたが、組合員の皆様には大変お世話になりました。豚事協では私の業界経験を皆様にお役立ていただくとうと意気込んでおりましたが、特に専務理事を務めさせて頂いた期間はコロナ感染拡大と相まって、皆様と対面することも叶わず、お役に立てず申し訳なく思っております。この度は勝手ながら体調等一身上の都合により退職をさせていただくこととなり、心より申し訳なく感じております。皆様におきましては飼料原料高など生産原価アップが重くのしかかっておりますが、国産養豚のさらなる明るい未来が開けるよう、陰ながらお祈り申し上げます。短い期間ではございましたが、大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

入職のごあいさつ

加藤 大輝

初めまして、この度、日本養豚事業協同組合に勤務させていただきますことになりました加藤大輝（かとうひろき）と申します。出身は愛知県で、現在は茨城県に住んでおります。

今までは茨城県にて農産物直売所の店長やその立ち上げを支援する直売所コンサルティングを請け負いながら、小規模ですが野菜農家をしておりました。養豚業界とは異なり、37歳と若輩でまだまだ微力でございますが、少しでも皆様のお役に立てるよう精一杯励んでまいりますので、今後とも末永くよろしくお願い致します。ご意見ご要望ありましたらなんなりとお申し付けくださいませ。
(kato@tonjikyo.or.jp)



豚事協の年間行事

理 事 会

第 1 0 7 回		令和 4 年 1 月20日 (木) (東京)
第 1 0 8 回		令和 4 年 2 月25日 (金) (東京)
第 1 0 9 回		令和 4 年 2 月25日 (金) (東京)
第 1 1 0 回		令和 4 年 4 月21日 (木) (東京)
第 1 1 1 回		令和 4 年 6 月22日 (水) (東京)
第 1 1 2 回		令和 4 年10月13日 (木) (東京)

豚事協 ウェビナー

第 1 回		令和 4 年 2 月10日 (木) オンライン形式
第 2 回		令和 4 年 4 月14日 (木) オンライン形式
第 3 回		令和 4 年 6 月 3 日 (金) オンライン形式

女 性 部

第15回女性部セミナー 未定

そ の 他

海外視察研修 中止

※青字は令和 4 年9月 1 日以降の行事となります。都合によっては変更・中止となる可能性もありますこと、ご了承下さい。

編 集 後 記

今号にてご案内の通り、8月末で職員が1名退職すると同時に、1名新たに職員が加わりました。それに伴い業務体制の変更があり、次号より担当者が変更になります。基本的に2か月に一度の発行とは言え、日にちが過ぎるのはあっという間で、毎回どのようなページ構成にするか関係者と協議しながらの発行は時には困難を伴いましたが、みなさんのご協力のもと、約13年に亘り何とか担当を務めることができました。その間、原稿をご執筆いただいた組合員、賛助会員、養豚管理獣医師、そして業界関係者の皆様、またいつもゆめ通信を読んでいた組合員の皆様には感謝しかありません。この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

次号より新しい担当者の元、今まで同様皆様にとって有意義な情報をお届けする手段として、より充実した内容のゆめ通信が発行されることと思います。掲載して欲しい記事などのご要望等ございましたら、是非事務局までご連絡ください。今後ともゆめ通信をどうぞよろしくお願いいたします。(東)